**埼玉県における協同労働の実践報告や課題①**

**打越　紀子　労働者協同組合こうさてん　代表理事**

(P.1)

私は、埼玉県鴻巣市吹上でコミュニティカフェをやっております。

コミュニティカフェから始まって今は、障害福祉の事業を主にやっています。

打越紀子と申します。

(P.2)

今日、お伝えしたい事としては、私たちがどんな風に開業してきたかということ。それから、この１４年やってきてどんなことが変わったかということ。そして、労働者協同組合に組織変更したことについてお話したいと思います。

(P.3)

こうさてんは、そもそも2003年に生活クラブ生協の地域活動から始まりました。

この場所は、生協が家賃と光熱費を出してくれて、借りてくれていた家です。その家で、組合員が自由に活動できる場所という形で、その中で何かしたいなって言う組合員が文庫をやろうと。文庫というのは、小学生や幼児などが本を読みに来たり、遊びに来たりする場所ですけれども、そこから始まったのが私たちの団体です。

(P.4)

やってきた活動の中でやっていたのが、ひろば文庫という名前なのですが、子供たちに絵本を読むということが一番中心になった活動です。

月に一度はイベントとして、コンサートや手品、室内運動会、すいかおばけづくり、英語絵本など、そんな活動からはじまりました。

(P.5)

どんな子供が来ていたかというと、誰でも来ていいよということだったのですが、その中で気になる親子が何人かいて、その方たちにもう少し支援をした方がいいかなという事が重なり、もう一歩、二歩、次のステップに行きたいなという事を考えていました。子供の学習支援もこの頃はじめて、学校の勉強についていけないとか、もうちょっと違う事を勉強したいとか、そういうお子さんの勉強を見ることもはじめました。

(P.6)

その頃、子供だけでなく大人でも集まっておしゃべりをしたり、色々な事をしたいという意見が出て、いろんな人の居場所になるような場所として、コミュニティカフェをやりたいと思うようになりました。コミュニティカフェは世の中にまだ沢山はなかったが、幾つか先進的なコミュニティカフェができ始めた頃で、それを見に行って、「あんなことやりたい、そんなこともいいね」と言って生活クラブ生協の支部活動をしているメンバーと一緒に見るようになりました。

最初のメンバーは６人くらいで、生活クラブが運動していた「ワーカーズコレクティブ」という形、法人格はNPOで始めることになりました。

(P.7)

そんな折に、近所の団地の真ん中に空き店舗ができ、ここがいいのではないかという話になりました。

(P.8)

この「目的」に至るまで、メンバーで毎週夜に集まり、話し合い、何度も書いては消し、ビジョン、行動、などを作り上げていきました。

丁度この年が2011年で大震災があった年で、その時に私たちの居場所や役割、当時は絆という言葉が盛んに言われたので、繋がりが持てる地域社会をということを考えて、目的を決めていきました。

(P.9)

どんな事業を始めたかというと、初めは飲食サービス業をやっていこうということで、幸せのお茶の店と書いて「こうさてん」と読ませたが、この名前を決めるのも散々もんでもんで付けた名前だが、最初の飲食サービス業は非常に読みが甘くて、とても大変でした。それから、学習支援なども今までやってきた子供たちにやっていこうという事で続けていきました。その他にイベントを行ったり、地域の福祉サービスを行ったりしていきました。

障害福祉サービスは、２０１８年に加えました。今ではそれが最も売上高につながっていて、メイン事業のように見えますが、やはり最も儲からない飲食事業、つまりコミュニティカフェの部分が私たちの事業の根っこになっています。

根っこになっているからこそ、色々なサービスにつながっているという形になっています。

(P.10)

グラフがでており、こうやってみると右肩上がりにグングン上手くいっているように見えるが、飲食の最初の方などは、2011年の埼玉県の最低賃金が759円のところ、時給300円から始まりました。

もちろん、この状況だったら、最低賃金を保証する労働者協同組合にはなれませんでした。

私たちが最低賃金をクリアできたのは、2015年です。

それはなぜかと言うと、生活サポートという福祉の事業を始めたからで、そこが飲食事業を補う形となっています。地域福祉の分は、療育手帳をお持ちの方や身体障害者手帳をお持ちの方とかが生活サポート制度を利用していることが多く、ずっと見てきたお子さんが利用してくれてそれが広がり、福祉の分野が広がっています。

(P.11)

コミュニティカフェという根っこがあるから、枝が伸びて、葉っぱが出て、花が咲くという形です。

できることを、できる人が、できるだけ、というのが基本で、地域のニーズ、というだけでなく、自分たちがやりたいこと、楽しめそうな事、できそうなこと、あったらいいな、と思う事をやっていくことで、いろんな人を巻き込んで、人が広がり、仕事が広がっていきました。

一番その頃多かったのは、運転が出来なくなったという事で、私たちが行っている「福祉有償運送」ということで、近くのお医者さんに行くのに送迎するという、そんな仕事が多くありました。

(P.12)

運営に関しては、ワーカーズコレクティブというのは、とにかく会議でなんでも決める、相談するという事になっており、まず、会議を毎月やっているが、報告をしてどのくらいの収支でどういう風になっていると。それから、この会議には、出資している労働者は、誰でも参加できるが、登録ヘルパーは別に部門会議があるので、毎月の運営会議に出ているのは、飲食部門のメンバーが圧倒的に多いですが、そんな中で改善の提案等の会議を行っています。

無理をしないという事もこの中では気を付けていて、どうしても人が足りないとか、できない時はお断りするのも仕方ないし、お店を休んでしまうことも仕方ないという、無理をしないでやれることをやろう、という風に話し合っています。でも、実際のところはこのようなこともなく過ごしていますが、何とか毎月会議をして決めています。

(P.13)

これまで色んな事があったのですが、いろんな人が来て、いろんな事件が起こって、いろんな人が巻き込まれていくということもあって、コロナ渦もあったり、自分たちでできると思っていたことよりも多くのことを求められ、どうしようという事もありました。

全部説明する時間は無いので、気になる事例があったら後で質問してください。

最後の女子会からわいわい夕食会のところを説明していきます。

(P.14)

「わいわい夕食会」は、いわゆる「子ども食堂」なのですが、最初は大人も子供もやってくる女子会として始めました。

コロナ禍では、お弁当の配布形式でしたが、今では再び一緒に食べる形をやっています。

あっちでもこっちでもこども食堂が立ち上がって、私たちでもできるかなとなり、鴻巣では早い方だったのですが、子ども食堂をやっていると、子ども食堂があることがとっても良いことと思われがちだが、そうでもなく、運営している中では子ども食堂ではなく色んな人がきて交流することに力を入れるようになっています。

(P.15)

どんな人が来ているかと言うと、このような一人親家庭や生活困窮者などが来ているが、

「子ども食堂」と名乗ってなく、一人親家庭限定や、困窮者のみ、としていないので、特定されたくない人など誰でも来て良いところになっています。

また、食べ物だけでなく、品物も無料で持ち帰れる「くるくるひろば」を同時開催しています。

(P.16)

「くるくるひろば」とは、不要品交換会ですが、生活クラブ運動グループの大人の学校で教わった「シェア社会」を目指して、世田谷区にある実際の店舗の方法を参考にし、開業しました。

サイトで知り合った古物商が、店主として運営を手伝ってくれています。

(P.17)

イベントでも色んなイベントを行っているが、大人も子供も楽しめる、地域の人が交流できるイベントを行っています。

(P.18)

もちろん、いろいろな機関と連携、協力しています。

さらに繋がりを増やしたいと思い、ごちゃまぜの会、というのも実施します。

私たちは、今になると色々な生活の困りごとをこうさてんに相談すれば、何とかしてくれるねという事も増えてきたので、これは広がってきたなと思っております。

(P.19)

組織変更は、去年したのですが、やっぱり元々「ワーカーズコレクティブ」ということで、一人一票で決めてきたので、３年間は組織変更ができるということで、「じゃあ、早くしなくちゃ」という事で、本当は締め切り間近の今年しようと思ったが、良いことは先にした方がいいだろうという事で、去年のうちにずんずん進みました。

(P.20)

初期のスタッフがいったん抜けて、数年後に再び厨房へ。

幸茶店での集まりに参加した人が、手仕事を教えるようになり、厨房スタッフへ。
ドライバーについて、何度か来店して質問していた人が、３年目に運転スタッフに。
子育てサロンに来ていたママが、赤ちゃんをおんぶしてしばらく厨房に入っていたが、ブランクを経て、営業担当で活動。など、スタッフの出入り、入れ替わりがあります。

一つも何も知らない、労働者協同組合とは何のこっちゃ？の人たちでも気軽には入れて、仲間になれるというところを目指しています。

(P.21)

働きたいんですが、と言ってくる人も増えました。

この人に何ができるかという事を探して、これなら出来そうっていうこと、例えば掃除とかチラシ折りとか、そういう事なら出来るよという事を始めていただいて、その後出来る事を増やしていただいて、働いてくださる方も多くなってきています。

疾患や障害で、急に休む可能性のある人もいますが、そこをカバーできるやり方を考えるようにしています。

(P.22)

あっちの人から、というのは、客席にいた人が手仕事の講師になったり、パッチワークの生徒さんが飲食のスタッフになったり、

ヘルパーとして入った人が子ども預かりや掃除の仕事もしてくれるようになったり、という事です。

最高齢の組合員は82歳で、昨年は送迎の利用者でしたが、先週は樹木の剪定をする労働者になったりしています。

(P.23)

地域に幸茶店のこと、まだまだ知られていないのですが、くるくるの開店で高齢男性にアプローチできるようになってきました。

さらに、広がり、つながりを心がけ、仲間づくりを広げていきたいと思っております。

(P.24)

労働者協同組合への組織変更してどうなったかというと、スタッフが改めて意識することができたということですが、正直なところ、特段の変化はないのです。

昨日の続きの今日があり、今日の続きの明日が来る、という感じです。

現在、NPO法人で不都合がなければ、組織変更の必要はないかもしれません。

でも、法人格が変わることで、メンバーと活動を分かち合い、一緒に考えて運営していくスタイルを、みんなで意識して、これが自分たちのやり方だと、誇りをもって活動するきっかけになるかもしれません。

「労働者協同組合」は、まだまだ、「それなぁに？」と言われてしまう法人格です。

この働き方、自分たちが自分たちの事を決めるという運営方法が世の中に広まり、当たり前の存在になると、社会も変化してくるのではないかと思います。

今、NPOからの変更を考えている団体の方、誰かと一緒に起業しようと思っている方、ぜひ、労働者協同組合の仲間になってくださればいいなと思います。

最後に、私たちの幸茶の歌があるのですが、最後の部分だけ歌います。

♪コミュニティカフェ幸茶店のうた♪

「誰かのため、何かをして、微笑む人がそこにいる。　幸せのお茶の店　コミュニティカフェ幸茶店」

ご清聴ありがとうございました。